

実践事例.08

ワークシートとグループ学習を用いた
授業実践を積み重ね
全教科で「言語活動」の定着を目指す

群馬県立太田工業高校

コミュニケーション能力を
求める企業が急増

富士重工業の本工場などが操業する、北関東有数の工業地帯に位置する太田工業高校。50年以上続く工業の伝統校で、毎年6割以上の生徒が就職していく。

そんな同校が今、「言語活動」に積極的
に取り組んでいる。国立教育政策研究所
教育課程研究センターの「教育課程研究
指定校事業」における2011～2012
年度指定校となった。13年度は実践協力
校として協力を継続している。

なぜ同校が「言語活動」に取り組むよう
になったのか？ 11・12年度に研究推進
委員会の研究主任を務めた諏訪淳一先生
は、次のように語る。

「2つ理由があります。1つは企業からの
要請です。『コミュニケーション能力のある
若者を採用したい』という要望をいただく
ことが、ここ3、4年で急速に増えました。
今、入社すると親子ほど歳の離れた先
輩社員と接することが普通になっており、

そこでうまくコミュニケーションが取れない
ために離職するケースも少なくないので
す。もう1つは本校の新学習指導要領へ
の対応として、いかに授業のなかに言語活
動を取り入れていくかを模索したいとい
うことです」

研究推進委員会は、校長、教頭、教務
主任、学科主任、学年主任、研究主任、教
科担当教諭、国語科教諭の計15人で構
成。ここが中心となって、言語活動を進め
ていった(13年度は、活動は継続してい
るが、委員会自体は解散)。

生徒が発言しやすいのは
すでに「知っていること」

同校が目指したのは、世代の異なる人
にも自分の気持ち伝えられ、相手の言
うことが理解できるようにすること。その
ようなコミュニケーション能力が身につく
よう言語活動を導入することにした。具
体的には、授業中に生徒が話し合う機会
を増やしていく活動である。その手法と

して、「ワークシート」と「グループ学習」を
取り入れることに決めた。

やり方は、まず初めに教員が何らかの
説明を行う。次に、生徒が自分の意見や
解答をワークシートに記入。それを基にベ
アやグループで話し合う。最後に、グルー
プで意見をひとつにまとめ、代表者が発表。
このようなプロセスを「機械工作」や「電
気基礎」といった教科の授業でトライアル
していった。

11年度最初の試みは、進行している授
業に沿った内容について教員が問いを発
し、ワークシートに書いてもらうことだっ
た。ところが、生徒のシートはほとんど白
紙だった。当然ながらグループでの話し合
いもうまくいかなかった。

次はそれを反省し、生徒にとって身近
なテーマを取り上げることにした。例えば、
「中学生に携帯電話は必要か？」という内
容の授業を行った。自分の意見をワークシ
ートに書き、グループで話し合う。このテー
マは関心も高く、話し合いも盛り上がった。
「意見は、自分がかつ知識から出てくる」

電気科
諏訪淳一先生機械科
城田純一先生

という気づきを得ました(諏訪先生)。け
れどもこのようなテーマばかりでは、教科
の学びから離れていってしまうことも自明
であった。

その次に、「知識がないのならば、それを
補おう」と試みた。例えば、「電子レンジの
仕組み」についてインターネットを使った調
べ学習を行い、そこからグループ学習にも
ついでこうとした。ところが、あまりうまく
いかなかった。検索キーワードがほとんど
同じになってしまい、参考にするサイトも
全員が似通ったものになってしまったので
ある。

こうしたさまざまな試行錯誤によって、
「生徒の話し合いが活発になるテーマ」が
次第に見えてきた。それは、「すでにもって
いる知識」を活用することだ。中学校や高
校ですでに学んでいる分野について、それ
を応用させたり、発展させる授業のなかで
言語活動を取り入れてみる。すると活発
な話し合いが行われることがわかってき
た。例えば、1年次に学んだデジタル回
路の知識を使って、3年次に論理回路図

School Data

1962年創立 / 機械科、電子機械科、電
気科、情報技術科 / 生徒数585人(男子
557人・女子28人) / 進路状況(2012年
度実績) 大学6.3%・短大2.6%・専門学校
24%・就職66.6%・その他0.5%

取材・文 / 荒尾貴正

Communication skills

コミュニケーション能力を育む



ミニホワイトボードを使った、グループごとの発表（機械工作<1年生>）



ミニホワイトボードを黒板に貼り付けて、全員が発表内容を確認（電気基礎<2年生>）

■ ワークシートの例

ワークシート①

4サイタルエンジンと2サイタルエンジンを下記の順序ごとに、順番をまとめてみよう。

4サイタルエンジン	2サイタルエンジン
構造	
パワー	
エンジン音	
燃費	
開発中の 特徴や実装	

■ 言語活動における発表のルール

- 大きな声で発表する
- ですます調で発表する
- 聞いている人のほうに体を向けて話す
- 話している人のほうに体を向けて聞く

12年度に入ると、授業づくりはさらに洗練していった。「すでももっている知識」を使うというポイントを外さず、加えて、授業で最終的に生徒にどのような発言を

言語活動を広くとらえて 普通教科での実践も目指す

また、先進校視察でも収穫があった。神奈川県立光陵高校を見学した際、生徒がミニホワイトボードを使って発表していた。各グループの位置から発表しやすくなるすばらしいアイデアだと思い、購入を決定。現在は、前に立って発表する際にも使ったり、マグネットで黒板に貼るなど、用途をさらに工夫している。

今年度からは、「全教科で言語活動」を取り入れることを目指していく。しかし、やり方はあまり限定せず、「グラフを描くこと」や「隣の人と意見交換をすること」も言語活動ととらえて、先生方の幅広い実践を応援していくという。

今年度からは、「全教科で言語活動」を取り入れることを目指していく。しかし、やり方はあまり限定せず、「グラフを描くこと」や「隣の人と意見交換をすること」も言語活動ととらえて、先生方の幅広い実践を応援していくという。

今年度からは、「全教科で言語活動」を取り入れることを目指していく。しかし、やり方はあまり限定せず、「グラフを描くこと」や「隣の人と意見交換をすること」も言語活動ととらえて、先生方の幅広い実践を応援していくという。

11年度はさまざまなテーマや手法を試すために、「機械工作」や「電気基礎」では月1回程度、言語活動を取り入れた。しかし12年度からは、学期に1〜2回程度にした。

「言語活動ばかりでは授業が進まなくなってしまう」と、取り入れやすいテーマとそうでないテーマがあり、必然的にそうなりました（諏訪先生）

出ています。現在、採用面接の練習をしています。例年よりしっかりと受け答えができているように感じます。言語活動では、国語科に協力してもらって、「大きな声で発表する」「ですます調で発表する」といったルールをつくりました。それが浸透してきたのかもしれない。（城田先生）

実践のポイント

生徒よりも教員にとって 学びの多い活動です

ていく理由は何か？ 研究推進委員会から引き続き、現在も熱心に活動している城田純一先生は、このように語る。

「コミュニケーション能力について企業からの要望が高いのは明らかですから、実業高校である本校としては、それに組み込まないわけにはいかないのです」

実践で難しいのはどの部分ですか？

テーマ設定だと思います。公開研究授業の際、「こんなに簡単な内容でいいんですか？」と聞かれたことがあります。外からはそう見えるのだと思いますが、難しい内容だと議論にならないのです。内容を少しやさしめにして、生徒がもっている知識が活用できることを念頭に置くほうがうまくいきます。ワークシートも教員はつ

いて分量を多くして、生徒に多くを要求してしまいますが、「話し合う」ことを主眼に置かなければ、分量も抑え気味が良いと思っています。（諏訪先生）

言語活動に取り組んだ率直な感想を

正直なところ、生徒より私のほうが勉強になっていると思います。こういう授業をするようになって、どうしたら生徒が興味をもってくれるのか真剣に考えるようになりました。教員と生徒の「コミュニケーション」が日頃からうまくいっていると、授業もスムーズに行えることにも気づきました。（城田先生）

私が担当になると聞いたとき、目の前は真っ暗、頭の中は真っ白になりました。しかし取り組んでいくうちに、これは教師として初心に戻れるチャンスだとわかりました。本当に大変な2年間でしたが、やらせていただいた本当に良かったというのが率直な気持ちです。（諏訪先生）